思い出三題

校章を手にして

松見　得明（旧1回生）

岩中に入学はしたものの校章がなかった。校章のない帽子をかぶっての登校は無籍者みたいで会う人ごとに恥ずかしい思いをし、気おくれのすることだった。盛商、盛農生との出会いはともかく、盛中の生徒と出会ったときは気おくれがして逃げ出したいものだった。そうしたことで無帽で登校する者もいた。

杜陵小学校での間借り生活が終り（一〇日ばかり）大沢川原の校舎（現岩手女子高校のところ）に移って一カ月ばかりしたある日、全生徒（といっても一回生一〇六名）講堂に集合せよという。何事ならんと整列して待つことしばし。

なんとなく居並ぶ先生方の顔が晴ばれしているように見える。壇上に上った鈴木校長もニコニコ顔である。

「今まで校章のない帽子をかぶってつらい思いをしたことだろう。すまなかった。だが今日は皆さんに校章をあげます。明日からはこの校章をつけて、岩手中学校の生徒としての誇りをもって登校するように。」

ということだった。ついで校章のデザインや意味するものなどについてのお話があったが、生徒にとってはそれよりも一刻も早く見たい、手にしたいの一心だった。教室にかえり胸おどらせて蓋をとった。

桜の花弁の中央に嵒（巌の古字）が金色に、中が銀色に浮かんでいた。素晴らしかった。皆声もなく見入っている。

自らにして〝ようし、これからだ〟という決意が沸いていた。それは学校の象徴であると共に、自分の象徴でもあったからである。

パイオニアスピリット

パイオニアスピリット、この言葉は新渡戸稲造先生の講演以来鈴木校長からことあるごとに聞かされた言葉である。

その主旨とは先駆ということである。先駆するということは後から来る者のために他に先んじて行なうということであり、パイオニアとは道なきところに道をつけてゆく者のことである。君達はこの学校の先駆者である。

どんな学校にするか。どんな校風をつくるか、みんな諸君の肩にかかっている。パイオニアの精神を忘れずに進んで立派な校風を作るように努めてもらいたい。大いに期待している。というようなものであったと記憶している。

まことに感銘深いお話だった。頑是ない私達だったが、先駆者たらんとの灯が点ぜられたのであった。

お話の通りこの学校には歴史も伝統もない。全くの白紙であり、そこに私達がその一頁を記すのだ。しっかりせねばと身のひきしまる思いだった。

生徒間制裁とその裁定

何年生の時だったかはっきりしないが、下級生とのトラブルであるから三、四年頃のことだったと思う。

一回生として良い校風をという自負みたいなものがあり、それに上級生の権威にかけてという思い上がりから級友の二、三が日頃生意気な奴だと目をつけていた下級生を教室に呼び出し、その生活行動や上級生に対する態度の不遜について詰問した。

ところが生意気だと思われるだけあって反発して認めようとしない。そうなると上級生を上級生とも思わぬ奴と感情が先に立ち、つい殴りつけてしまった。このことが先生の耳に入ったらしく担任の事情聴取があった。それから数日たって殴りつけた生徒達が校長室に呼ばれた。厳罰に処されることだろうと心配し、場合によっては下級生の非を訴えて助命をと待っていた。

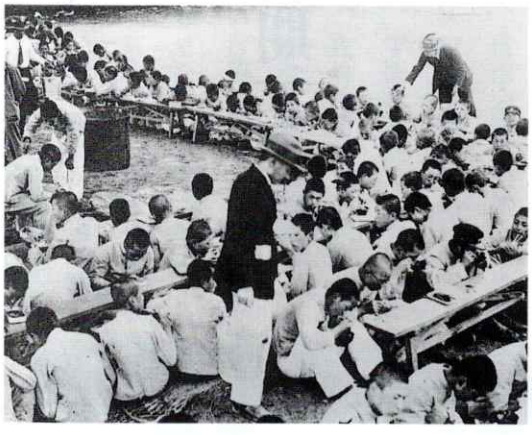
聞いてみたら殴られた生徒も呼ばれていて、両方とも床の上に相対して正座させられ、

「下級生に校風を乱す行為のあった場合、上級生がこれを糾し反省を求めることはいいが制裁を加えてはならない。制裁は校長がすることであって生徒の為すべきことではない。ところで、今私は君達の理非を糾明し、処罰しようとするのではない。それよりもお互い、同じ学園の生徒なのだから力を合わせてよい校風を作るようにしてもらいたい。

ではまず殴った方から手をついて謝りなさい。殴られた方も手をついて反省しなさい。」

といわれお互いに謝って帰されたということであった。

まことに次元の高い教育であり、今にしてひとしおの敬慕を禁じ得ない。



野食会で（昭和６年）

報恩の旅　奈良東大寺で（昭和６年）

昭和７年ラジオ体操